今回の同人誌作製に伴い、ささやかな書き下ろしを加えました。

黒子と緑間が子づくりを始めてからすでに2年。残念なことに、いまだ黒子が懐妊する気配はない。これまで黒子は自分がこどもを生むのに適した身体なのだと思い込んでいたが、それは根拠のない自信だったようだ。

風呂上がりの濡れ髪を乾かしながら、黒子はため息をついた。

「どうしたのだよ？ 悩みごとか？」
「……すみません」

「謝る必要などない。俺でいいなら相談にのるが」

黒子は緑間をじつと見上げた。バスケットをしていたころは縦の長さに比して前後に薄い印象のある体形だった緑間であるが、大人になった今、体の厚みが加わって男の色気も増した。緑間ほど美丈夫という言葉の似合う男を、黒子は他に知らない。そのうえストイックな性格からは想像できないほど、緑間は精力旺盛だった。

こどもができない理由は自分にあるのではないかと考えざるを得ない。黒子はため息をかみ殺した。

「こどものことです」

「誰か問題があるのか？ 陽菜は反抗期のようなだが、そういう年頃だからあまり気に病むな」